

言葉は必ず何かを表象する記号なのか

—パースとウィトゲンシュタインから考える言語の記号学—

今井 友哉（立命館大学大学院）

発表要旨：

本発表は、二人の哲学者、チャールズ・サンダース・パースとルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの言語に関する見解を比較しながら、さまざまな記号の一つとして言語を扱うことの是非を再検討する。

パースにとって言語は、われわれに現れるさまざまな現象（表象）のうちの一つであり、言語の働きは、そのような表象の働きの一部として説明されるものであった。また、パースにとって言語を含むあらゆる記号は、何か（対象）を誰か（解釈項）に対して表すという表象の働きを構成するものである。しかし、パースの考えるように言語は、何かを表象するという働きに汲み尽くされるものなのだろうか。また、もし言語に何かを表象する以外の側面があるなら、記号論はそのことを扱うことができるのだろうか。

上記の問いを検討するために、パースとウィトゲンシュタインの言語（記号）に関する見解を比較する。ウィトゲンシュタインを参照する理由は、二つある。一つは、パースとの共通点による。両者は、言語の働きを、言語以外のもの（例えば認知能力）に還元せず、言語そのものの働きに即して考察する。よって、言語の働きにのみ焦点を当て考察することができる。もう一つは、パースとの対立点による。ウィトゲンシュタインは、言葉が一般に何かの表象であることに反対する。黒田（1975）が述べるように、そのような見解は、「一人称体験記述」の分析を通じた結果である。しかし、この見解は一見してパースと鋭く対立する（パースは、記号一般に何かの対象を表す「相関項 correlate」が関わると思う）。この対立の背景にある両者の見解を考察することは、そのまま上記の問いを検討することである。

本発表では、まずパースがどのような意味で記号は対象を表象すると考えているのかを概観した上で、ウィトゲンシュタインの「一人称体験記述」の考察とパースの（一人称体験記述の問題と対応点の多い）「質 quality」概念の考察を取り上げる。その上で、両者の見解のずれをそれぞれの考察方法に着目しながら比較し、そのずれは言語の生成過程の二つの見方を反映したものと理解できると論じる。以上の考察を手がかりに、言語の働きはその見方に応じて表象の働きからは説明し切れない一側面があることを示す。

参考文献

Ishida, Masato. (2009), *A Philosophical Commentary on C. S. Peirce's "On A New List of Categories": Exhibiting Logical Structure and Abiding Relevance*. Doctoral Dissertation.

黒田亘（1975）『経験と言語』東京大学出版局。

Peirce, Charles S. (1931-1958), *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vol. 1-8, Harvard University Press.

Wittgenstein, Ludwig. (1958), *The Blue and Brown Books*, Basil Blackwell. (大森荘蔵（訳）『青色本』、ちくま学芸文庫、2010 年）